

第三章 フランソア喫茶室創業

瀧川事件と中井正一

共産主義が衰微するにつれて、弾圧の矛先は自由主義に向かった。一九三三年の京大・瀧川事件はその典型であり、京都家庭消費組合のメンバーの多くも渦中にいた。

一九三〇年二月から京都家庭消費組合の理事に選出された中井正一は、当時京大文学部大学院に在籍していた。

中井正一は一九〇〇年、大阪の緒方病院で帝王切開により生まれた。一九一八年に広島高等師範学校附属中学校を卒業後、第三高等学校に入学する。二二年には京都帝国大学文学部哲学科に進学した。文学部では京大端艇（ボート）部に所属し、毎年瀬田川で開催される学部対抗の水上戦に出場する。京大端艇には数年前まで三木清（一八九七〜一九四五）らが所属していた。¹一九二五年、大学院に進学し（一九三四年度末まで在籍）²、文学部教授・深田康算（^{やすかず}一八七八〜一九二八）に師事する。深田は一九二八年一月に急死し、その死後、中井ら教え子達が集まり、深田康算全集を刊行する。こ

の時の全集編纂メンバーの間で、哲学と美学をテーマとした同人誌を創刊する構想が生まれる。一九三〇年九月、徳永郁介、富岡益五郎、長廣敏雄、藤井源一、藤田貞次、水澤澄夫、そして中井正一を同人とする「美・批評」が刊行された。刊行にあわせ、「美・批評」発刊記念講演・音楽會³を開催し、文学部講師・須田国太郎らの講演や、京大音楽部の演奏が行われた。

「美・批評」創刊後、東大出身で京大大学院に在籍していた辻部政太郎や、伊等卓治、水沢澄夫、諏訪次郎も同人に加わった。刊行にあたっては、大阪朝日新聞記者であった藤田貞次を通じ、同社長・上田精一から資金援助を受けた。

「美・批評」は平均すると約二ヶ月間隔で刊行された。中井らの活動について、吉田正純は次のように記述している。

特に中井正一はこの頃から参加者を「エネルギーッシュで、無類のフレキシビリティと、プロダクティブな思索力」（辻部）をもつオルガナイザーとして登場しつつあったが、左派的ないしアカデミックな理論の指導者というより公私にわたる諸個人の議論・思索の媒介者・コーディネーターだった。また辻部は演劇論のほか中井らと共同での色彩映画『海の詩』『十分間の思索』の撮影制作、長広は専門の考古学のほか京大交響楽団での活動など表現活動への接点ももち、やや年長の富岡（哲学専攻）が編集・経営などまとめ役を引き受けていた。辻部によれば当時同人の関心は独仏英などのシュールレアリズム、シュプレマテ

イズム、バウハウス、新心理主義文学、ノイエザツハリヒカイ
ト(新即物主義)の諸理論やソ連のルポルタージュ文学・映画理論
／実験・アヴァンギャルドを紹介・咀嚼しながら、「それらを貫
く新しき美の「集团的・社会的性格」の追及と、それを感覚的
に基礎づける『物理的・コミュニケーション手段』の新たな
出現の意義の解明」に集中した。⁴

一九三三年五月、「美・批評」は一時休刊する。これにはメンバー
の就職・異動、財政難などが主たる理由であったが⁵、いまひとつ
の背景として、瀧川事件があった。

一九三三年四月、文部省は京大法学部に対し、瀧川幸辰たきかわゆきとし(一九八一
〜一九六二)教授の辞職を要求する。瀧川が著した「刑法読本」や、
前年の中央大学での講演で、当時の刑法に否定的な見解を表明した
ことが理由であった。「刑法読本」は四月十日に発禁となった。

京大法学部教授会は瀧川辞職要求を拒否し、これが容れられなけ
れば全教員が連袂辞職すると表明した。京大総長・小西重直(一八
七五〜一九四八)も同調し、文部省との対立が激化する。以前から
瀧川を批判していた国士館専門学校教授で、国体擁護連合会員の蓑
田胸喜(一八九四〜一九四六)は、瀧川のほか、佐々木惣一、恒藤
恭、宮本英脩(一八八二〜一九四四)、宮本英雄を非難した。⁶

この時、文学部には全協通信労働京都地区オルグの高木養根やすもと(一

九一一〜)⁷が在籍していた。高木は第一高等学校在籍時から共産党
活動に参加していたとされる。共産党京都市委員会は高木に文学部
学生の組織化を委ね、文学部学生大会で法学部支持を決定させた。
同時に高木は、京大から消滅していた共産青年同盟の細胞を復旧す
ることに成功した。⁸

当初、中井はこの学生運動と距離を置いていたが、文学部院生代
表・真下信一ましたしんいち(一九〇六〜一九八五)や久野収くの おさむ(一九一〇〜一九九
九)に引き込まれる形で運動に参加する。このため、既に停滞気味
であった「美・批評」の刊行は、一時完全な休止状態となった。⁹

京都帝国大学新聞は、瀧川、末川らの支持を表明し、文部省と大
学との対決姿勢を鮮明にする。

遙か西、ドイツの焚書事件にも比すべく、我文部当局は瀧川
問題に端を発し教授会と学生の意思を蹂躪し、二十年来京大の
既得権たる教授会の権限を否定して大学自治を奪わんとしてい
る、今や問題は瀧川教授の問題ではなく全京都帝国大学の問
題、全日本の大学の問題であり、学問の独立、研究の自由、否
人類文化を脅かすものだ、法学部教授会も単なる瀧川教授に対
する友情を全く離れて、ひたすら純理論と真理の主張に総辞職
を覚悟の根強い抗争をつづけている、他方問題のここにいたる
まで冷静な態度を持っていた法学部の学生大衆は文部当局の変
らざる強硬な弾圧に対し数日前より俄然有信会学生大会を決行、

自由擁護のため立って教授会の意向の絶対支持を絶叫し、経済学部学生間にも跳起の機運が漂っている、なお最初より当局の見解に同じ難しとしていた総長は、ますますその決意を固め、研究の自由を愛する全学教授の決意と、一分の隙もない法学部教授会の結束と転落の大学に唯一残されたその最後のものを護らんとする全学学生大衆の熱意を携えて明後日頃上京直接文相へ最初の回答に変化なきことを伝えるであろう、文部省が予定通り分限委員会をふりかざして大学の自治を脅かす如きことがあるならば、全国大学の教授及び一般論者の奮起も予想され、吉田山下の自由の学園は将に嵐の真只中に突入せんとしている。

10

その後の経緯から明らかなように、「全学教授の決意」、「一分の隙もない法学部教授会の結束」、「全学学生大衆の熱意」はいずれも長くは続かなかつた。しかし、五月二五日の文官高等分限委員会における瀧川休職決定翌日、約一五〇〇名が集まった学生大会は空前の規模であり、「日本の学生運動史上、戦前では最後の燃焼であった」。¹¹この大会以降、法学部学生を中心とする運動は京大全体に波及し、さらに東大、東北大、九大にも及んだ。¹²立野正一ら美工出身者達は、一四年前の美工騒動を思い出しただろう。

小西総長は法学部と文部省との調停を模索するものの失敗し、六月一七日、就任僅か三ヶ月あまりで辞職を表明する。六月二〇日、追い討ちをかけるように、高木養根ら共産青年同盟メンバーが警察

に検挙される。高木を支援していた同志社大学教授・長谷部文雄（一八九七〜一九七九）¹³と、同予科教授・松岡義和も検挙された。それまで学生大会を黙認してきた学生課は、小西の総長辞任表明と、共産青年同盟弾圧を機に、大会禁止を命じる。その一方、授業ポイコットによって帰郷する学生も続出し、この頃から運動は退潮に転じた。

七月九日、瀧川をはじめ、佐々木惣一、宮本英脩、森口繁治、末川博の計六名が連袂辞職する。新総長・松井元興（一八七三〜一九四七）は、他の法学部教員の慰留に努めた。九月までに、瀧川らを追って辞職する教員が出る一方で、残留する教員や、宮本英脩のように復帰する者も現れた。この結果、辞職グループと、残留・復帰グループとの間に分断が生じた。

七月、大学は夏季休暇に入り、学生運動はさらに沈滞する。

八月八日、小菅刑務所に収監されていた河上肇が共産党からの脱退を表明し、党や全協の活動家達に衝撃を与える。かつて京大を燦然と輝かせた老闘志の屈服であった。

瀧川復職は実現しないまま運動は終息に向かう。¹⁴運動期間中、総力を挙げて瀧川擁護の論陣を張った京都帝国大学新聞は、大学の圧力で廃刊の危機に直面する。結局、編集部員の総入れ替えと引き換えに、辛うじて存続が認められた。夏季休暇明け最初の九月二一日付け第一八七号では時事性が消え失せ、学術大会や大学間スポーツ競技などの学内機関紙的報道のみとなった。¹⁵¹⁶

閉塞する状況の中で、京大文学部哲学科教授・田邊元（一八八五

（一九六二）が真下信一を支援する。田邊は、検挙された同志社の松岡義和の後任として真下を推薦し、講師採用がかなう。真下は新村しんむら猛たけし（一九〇五〜一九九二）¹⁷と和田洋一とともに「美・批評」再刊に取り組む。¹⁸

そして一九三四年五月、「美・批評」は刊行を再開する。¹⁹再刊された「美・批評」では、「海外情報」欄を設けて、世界の反ファシズム運動の紹介を始めた。瀧川事件や、同じく三年のナチス政権樹立を背景に、「美・批評」は反ファシズム色を帯び始めた。

翌三五年二月、「美・批評」を発展的に解消する形で、「世界文化」が創刊される。中井正一は反ファシズムを前面に押し出すことに慎重であったが、真下信一や新村猛に促され、弾圧覚悟で「世界文化」の創刊を決意した。²⁰

「美・批評」の「海外情報」欄は、「世界文化情報」欄として継承され、「世界文化」誌の中心記事に位置づけられた。そして、パリの文化擁護国際作家大会、ルネ・クレール（René Clair 一八九八〜一九八一）等の映画・演劇評論、ハインリヒ・マン（Luiz Heinrich Mann 一八七二〜一九五〇）・トーマス・マン（Paul Thomas Mann 一八七五〜一九五五）兄弟など反ナチ亡命作家による「ザムリング」活動、エゴン・ヘルヴィン・キッシェ（Egon Erwin Kisch 一八八五〜一九四八）のルポルターージュ、ジェイムズ・ジョイス（James Augustine Aloysius Joyce 一八八二〜一九四二）やデイヴィッド・ハーバート・

ローレンス（David Herbert Lawrence 一八八五〜一九三〇）の個人的リアリズム文学、ソ連の社会主義リアリズム、イタリア・ファシズム芸術論批判などが紹介された。京大理学部出身の武谷三男（一九一〜二〇〇〇）も弁証法に関する論文を寄稿した。²¹ 中井は三四年から三五年にかけて京大文学部講師を務め²²、同時に相愛女子専門学校でも講師を務めている。木下恵介（一九一二〜一九九八）が監督した松竹映画「女の園」（一九五四年）には、中井正一を思わせる大学教員が現れる。ダンディな男性教員が女子学生に哲学史を講じる短いシーンであるが、当時の中井の姿を彷彿とさせる。

黒板に二人の哲学者の名を書く。

Fichte

Schelling

『カントからヘーゲルまで』の著者・クローネルに従えば――

黒板に Kroner と書き加える。

「――一七八一年、すなわちカントの『純粹理性批判』が最初に世に現れた年から、ヘーゲルの『法の哲学』が公刊されました。一八二一年に至るまでの、僅か四〇年の間に完成された」と

ろの、それ自体完結的な哲学体系であります。」

「女の園」は、阿部知二（一九〇三〜一九七三）の小説『人口庭園』に基づく映画で、一九五〇年代前半の京都の女子大学を舞台にしている。頑迷な管理教育を行う学校側と、学生自治を求める学生側の対立を背景に、主人公の女子学生が自殺に追いやられるまでを描く。キャンパスの撮影には立教大学の校舎が用いられている。撮影当時、立教大学には武谷三男が教授として在籍しており、あるいは彼が何らかの形で協力したかもしれない。

一九三六年二月にスペイン人民戦線が勝利し、同年六月にフランス人民戦線内閣が成立すると、「世界文化」もその詳細を積極的に報道した。²³ その反面、「世界文化」は、大衆文化批評や機械・映画論など「美・批評」のユニークさが引継がれなかったという久野収の反省も聞かれる。²⁴

吉田が指摘するとおり、中井の活動の最大の特徴は、消費組合活動と「美・批評」の研究会を並行して実施した点にあった。

何よりこの時期の消費組合と研究会を二つの軸として開始されたネットワークの最大の果実は、双方とも（能勢・中井らが）いくつもの失敗を経て相互批判・討議を重ねながら差異をはらんだ「集団」の意思決定の過程の対象化とさえいえる。²⁵

能勢・中井らは「美・批評」でアカデミズムの壁を乗り越えようとし、消費組合で階級の壁を乗り越えようとした。そして、旧総評メンバー、全協関係者、朝鮮人との接触——しばしば衝突に発展したが——を生み出した。だからこそ、このグループは、久野や真下らの政治的ラディカリストをも惹きつけたと言える。

「世界文化」グループは、松竹下鴨撮影所で全協活動に関与していた斉藤雷太郎（一九〇三〜一九九七）と出会うことになる。

共産党と全協の衰微

一九三一年に旧総評グループが京都無産者消費組合を創立したことは前に見たとおりである。しかし、消費組合は活動家の避難所の意味合いが強く、立野らにとつての最大の目標は、あくまで日本共産党と日本労働組合全国協議会（全協）の再建であった。

総評の解体は全協への合流を前提にしていた。ところが、その肝心の全協は、一九三〇年二月の中京刑務所を襲撃や、同年一月の京津電車転覆事件など、無軌道なテロに走っていた。これらの無謀な戦術により、全協は徹底的な弾圧を浴びる。²⁶ 中井正一らが共産党への接近を躊躇したのは、階級一元論・政治優位などの教条に対する疑念²⁷に加え、こうした過激な活動を忌避したためであろう。

その後、大塚有章宅で立野と共に寄宿していた田中房次郎、白田

銀一、金井健吉、坂本秀雄や、陶磁器工組合出身の加藤護一らが地道に支持者の組織化に取り組み、一九三一年六月頃までに全協の京都地方組織を再建した。²⁸しかし、同年六月二六日に開始した伏見区向島町の日本製布会社工場争議は、翌日の警察の弾圧であっけなく終結してしまう。²⁹

日本製布以外では、日本電池、京大病院、陶磁器、市バス、市電、百貨店などの従業員に接触し、そのうち大丸・高島屋では比較的大きな組織ができた。

しかしこれらの組織も三一年八月二六日の大弾圧で一掃される。

同日、京都府警の武装警官四〇〇名が京都市内一六六ヶ所の活動家拠点を襲撃し、金井健吉、坂本秀雄を含む一〇一名の活動家を検挙した。金井は懲役三年六ヶ月、坂本は懲役三年に処せられている。³⁰

この八・二六事件にめげず、検束を免れたか、短期間に釈放された活動家達は、再び全協組織の復旧に着手した。陶磁器工組の加藤護一もその一人であり、三二年四月から六月にかけて、太秦を中心に起きた新興キネマ争議を組織した。三二年一月、加藤は全協一般使用人組合京都支部に新興キネマ分会を立ち上げ、地下から従業員組織化を企てた。四月、会社の人員整理の方針に反対した技術部助手・坂齋小一郎（一九〇九〜一九八五）らが解雇される。³¹これを機に組合員は争議を開始し、解雇・減俸反対、月給四〇円支給等の要求を掲げた。この間争議団は、リーダーへの参加や、松竹争議団と組んだゼネストを繰り広げた。京都消費組合も新興キネマ争議

を応援した。

またこの四月に結成されたばかりの京都消費組合が、米・野菜・竹ノ子・醤油・味噌・薪などを大八車に満載して争議団本部を訪れて激励し、争議団は内外の支持で、志気いよいよたかまった。³²

しかし争議は長期化し、会社寄りの従業員宅の襲撃や、右翼団体との衝突によって、警察の介入を招く。六月一九日、太秦署は全協の秘密本部を襲撃し、争議団は総崩れになった。加藤護一や坂齋小一郎は、この時も検束から逃れたが、新興キネマ分会は再建されなかった。³³

その一方、加藤護一の出身母体である陶磁器工組合は、依然として組合員約二八〇名の勢力を維持していた。この頃の京都では最大の組合の一つであったとされ、六月と十月の年二回、賃上げ要求・賃下げ反対を掲げて氣勢を上げていた。³⁴

京都市内の友仙工場群でも、織物産業の苦境とあいまって、全協による労働争議が活発に行われた。中でも洛北の運動は、他の地域に比べ一際目立っており、一九三〇年以来、立野らが培った闘争戦術が生かされていた様子が伺える。三二年八月には、京都消費組合と政府米払下げ運動で共闘し、デモや炊き出しを実施した。³⁵

しかし一九三二年九月三日、共産党・全協関係者に対して、前年

の八・二六事件を上回る一斉大検挙が行われた(九・三事件)。これは戦前京都の共産党関係者に対する最大の弾圧であった。この大検挙により、洛北友仙の全協組織も大打撃を受ける。

一九三二年の新興キネマ争議では、梶谷という男が争議団の末端で動いていた。梶谷は借家の家賃下げ運動に関わっていたようである。家賃値下げ運動は一九二二年から始まり、一九二九年に入つて急激に京都府下に拡大した。一時は有力な左翼運動の一つとなつたが、家主が自主的に家賃を引き下げた結果、運動は下火となり、三二年頃には完全に終息した。³⁶

ただし、全協自体はこの家賃値下げ運動にほとんど関与していない。恐らく値下げ運動の衰退で居場所を失いつつあつた梶谷が、全協に合流したのであろう。梶谷は全協の新興キネマ分会で活動を始めた。

一九三二年一月頃と思われるが、梶谷は松竹下鴨撮影所に就職する。彼は撮影所の仕事よりも、家賃値下げ運動や全協の活動を優先した。この種の活動家は他にもおり、撮影所内では「ズボラ組」と呼ばれていた。全協の新興キネマに続いて、下鴨撮影所にも全協の分会を組織しようとしていたのかもしれない。しかしその努力も実らないまま、翌三三年の春頃に梶谷は撮影所を去つた。

梶谷が下鴨撮影所に在籍したのは一年余りであつたが、この間に俳優・斉藤雷太郎(一九〇三〜一九九六)を巻き込み、反戦ビラの製作を手伝わせたりしている。その結果、斉藤自身も「ズボラ組」

に仲間入りすることになった。斉藤はその頃の様子を次のように回想する。

昭和七年、京大の瀧川事件のおきる前ごろ、梶谷というのが下加茂に入社してきた。新興キネマで組織運動をしていたとかで、いわゆる全協ヅラした、役者タイプとはほど遠い型の男だつた。類は類を呼んで、梶谷もズボラ組の有力なメンバーの一人になつた。

梶谷は借家組合に関係していて、撮影所の仕事はさぼり勝で、借家問題で走りまわっていた。私も何時の間にか、それを手伝うようになり、梶谷と行動を共にするようになった。そのうちに全協のアヂビラや、赤旗が私達の手の流れて来るようになった。だが撮影所に細胞が出来るという程ではなかつた。街頭連絡やアヂビラ造りなど手伝っているうちに、キャップの坂齋や、加納という女性の同志、その他の人々を知るようになった。

新興キネマの争議は、この人々の指導で行われていたようだ。大丸・高島屋のデパートのメンバーがやられたと聞いたのも、その頃と思う。新興キネマの争議が悪化して、弾圧がきびしくなり、メンバーがあげられたり、追われて身の置きどころもなく、おびえきつて連絡に来る者が出て来た。こうしたことを見聞するたび、どうしようもない自分の無力を切実に感じ、身を切られるような思いであつた。³⁷

一九三三年の九・三弾圧以後、全協はなおも組織再建を図る。山科精工所、島津製作所、寿製作所、鐘紡、京聯タクシー、第一製薬、大丸、高島屋、京大病院、京都府立医大病院、京都市電などに、それぞれ数名程度の分会が再建され、宣伝ビラの印刷・散布が行われた。³⁸

一九三三年二月一日の建国祭では、梶谷らが反戦ビラを散布している。建国祭は右翼団体にとって最大の行事であり、左翼のメーデーのような意味合いを持っていた。この建国祭では二五〇〇名の参加者があり、平安神宮から四条通りを経由して京都御所建礼門までデモ行進した。デモ隊が四条通りの大丸百貨店前にさしかかった時、梶谷は、全協の朝鮮人メンバーとともに、大丸屋上から反戦ビラを投げつけた。デモ隊からは「共産党を葬れ」という声が上がリ、五条署員ともみ合いになった。³⁹

斉藤雷太郎は、前日夜にビラの印刷を手伝っている。

ある晩、梶谷は私に金はあるかと聞く、少しならあると答えると、紙を買いに行こうと、ふたりで百万遍へ行った。大形の紙をかかえてかえると、半紙形に切っておそくまでかかってアヂビラを刷った。／翌日会社からかえってくると、梶谷が来て今日の様子を話してくれた。／大丸の屋上にはパイ公が警戒していた。アヂビラをかくし持った朝鮮の同志は、四条通りに面した屋上の右と左に別れて、何気なく入口近くに立つ梶谷を見ている。下の方から神州報国会、大日本生産党、国家社会党、

新興学生協会等々の反動団体の建国祭を祝う行列の歓声が聞こえてくる。屋上に居た大ぜいの子供達の客達はざわめいた。パイ公はその方へ気を取られて目をはなした。＼今だ、＼心で叫んで、梶谷は打ち合せ通り帽子のふちに手をかけた。一瞬、同志はアヂビラを街頭の行列目がけて投げつけた。各自がばらばらになつて階下へ来た時、アヂビラに気付いた行列の反動達は狂つたように殺気立って、屋上目がけて駆け上って行く。／各新聞は思いがけないこの出来ごとを大きくとり上げて、行列の混乱のもようをくわしく報じていた。昭和八年のことである。⁴⁰

あるいはこの時、かつて立野正一を教育し、今や国家社会党近畿地方連合会を率いていた早川忠孝が、梶谷のビラを手にしていかもしれない。

この建国祭から九日後、小林多喜二（一九〇三〜一九三三）が東京築地署で虐殺されている。さらにその四日後、満州国を承認しない国際連盟において、松岡洋右（一八八〇〜一九四六）は特別総会の席を蹴って退場した。

三三年三月、全協は東九条の友仙工場で争議を起こしたが、経営に窮した工場主が逃亡してしまい、失敗に終わった。⁴¹

同年五月二〇日の京都市議選では、左京区で立候補した朝田善之助を支持し、投票を呼びかけるビラを散布した。左京区では定員七名に対し、一三名が立候補者している。朝田の得票は四九二票で一〇位、落選に終わった。⁴²しかしこれらの活動によって、市議選前後

に共産党京都市委員会が再建され、坂齋小一郎が委員長に就任した。党京都市委員会は、発足と同時に京大・瀧川事件に直面した。そこで、京大文学部に在籍する高木養根を通じ、瀧川解職反対運動を展開した。高木は、一四名のメンバーを集め、共産青年同盟の京大細胞委員会を再建した。さらに京都府立医大に五名のメンバーからなる細胞を組織した。

これらの活動に対しては、同志社大学教授・長谷部文雄が二九〇円、同予科教授・松岡義和が二八五円、松竹下鴨撮影所建築設計係・加納龍一（一九〇四〜一九八八）が八五円の資金援助をしていたという。^{43 44 45}

しかし、京聯タクシー運転手の密告と見られる情報入手した警察は、六月二十日、坂齋、高木、長谷部、松岡、加納を含む全協関係者八四名を一斉検挙した。

坂齋の下で動いていた梶谷は、検挙こそ免れたものの、非常に危険な状態に陥り、下鴨撮影所を去っていった。

こうして京都の全協組織は全滅した。検挙から逃れた活動家達は、京都を離れるか、京都消費組合などの合法・非政治団体に逃げ込んだ。

、斉藤雷太郎はこの時の心情を、次のように語っている。

「今考えると、この人々は、特別に優れた才能を持っていたとは思えないが、その誠実さと自己犠牲の精神は、私などくらべものにならない程旺盛で、心から頭の下がる思いで、この人

達の行動を眺めていた。」⁴⁶

フランスア喫茶室創業と佐藤留志子

京大・瀧川事件が終息した頃の立野正一は、共産党細胞の組織化を担当していたと思われるが、いまだ検挙を免れていた。一九三〇年の洛北友仙争議以来、京都府警で立野の顔を知らない者はおらず、常に監視対象となっていた。立野と共産党との明確な関係を、警察は証明できなかったのだろうか？あるいは意図的に立野を泳がせ、機を捉えて同僚ともども一網打尽にする気だったのだろうか？

これまで党や全協を通じて生計を得てきた活動家達は、相次ぐ弾圧で困窮に直面していた。また、八・二六弾圧で逮捕・下獄した旧友・金井健吉と坂本秀雄も、出所後たちまち路頭に迷うであろうことは目に見えていた。

立野は、同僚と自分自身の生計を維持し、同時に共産党の再建資金を得るための方策を思案する。大塚有章が手がけた古本屋はあまり儲からなかった。銀行強盗ならば儲かったが、いろいろと問題も多い。そこで立野が選んだのは、共産党が従来から資金確保の手段としてきた喫茶店経営であった。

立野は店の建物の準備を始める。四条木屋町を少し下ったところにある町屋を買い取り、洋風に改装することにした。この町屋は高

瀬川に面しており、一九二〇年まで高瀬川の舟運業者が所有していた。店の軒にはスパニッシュ瓦を葺き、玄関扉にはガラス格子の窓をはめ、窓は飾り柵で覆った。店内の壁と天井は比較的簡素な漆喰仕上げとした。テーブルは今日使用されているものに近い古典主義装飾が施されていたが、椅子は比較的簡素なものが使用された。

店の名は、立野が憧れたバルビジンの画家にちなみ、「フランソア喫茶室」とした。フランソアは当初から本格的な名曲喫茶を目指したため、電気蓄音機と、クラシック音楽の新譜レコードを買い揃えた。レコード選曲は、立野の友人の音楽家・作曲家である関忠亮^{ただすけ}が

担当した。関が記したと思われるリストには、ベートーヴェン (Ludwig van Beethoven 一七七〇〜一八二七) の曲が最も多い。交響曲第三番、第五番から第九番、ピアノ協奏曲第二、第四、第五番、および弦楽四重奏、ピアノソナタ、ヴァイオリンソナタなど計三〇曲が記されている。他に、モーツァルト (Wolfgang Amadeus Mozart 一七五六〜一七九一) の交響曲、ピアノ協奏曲、ヴァイオリン協奏曲など計九曲、シューベルト (Franz Peter Schubert 一七九七〜一八二八) の交響曲第八番、バッハ (Johann Sebastian Bach、一六八五〜一七五〇) のブランデンブルク協奏曲、ブラームス (Johannes Brahms 一八三三〜一八九七) の弦楽四重奏、ベルリオーズ (Louis Hector Berlioz 一八〇三〜一八六九) の劇的物語「ファウストの劫罰」、ハイドン (Franz Joseph Haydn 一七三二〜一八〇九) のチェロ協奏曲、ヘンデル (Georg Friedrich Händel 一六八五〜一七五九) のメサイア、メンデル

ルスゾーン (Jakob Ludwig Felix Mendelssohn Bartholdy 一八〇九〜一八四七) のヴァイオリン協奏曲、シューマン (Robert Alexander Schumann 一八一〇〜一八五六) の歌曲集、チャイコフスキー (Peter Ilyich Tchaikovsky 一八四〇〜一八九三) の交響曲第六番、ピアノ協奏曲第一番、弦楽四重奏、ムソルグスキー (Modest Petrovich Mussorgsky 一八三九〜一八八二) の歌曲集、グラズノフ (Aleksandr Konstantinovich Glazunov 一八六五〜一九三六) のヴァイオリン協奏曲、ドビュッシー (Claude Achille Debussy 一八六二〜一九一八) の交響詩『海』、管弦楽のための映像などが見られる。現代音楽ではプロコフィエフ (Sergei Sergeevich Prokofiev 一八九一〜一九五三) やストラヴィンスキー (Igor Fyodorovich Stravinsky 一八八二〜一九七二) のヴァイオリン協奏曲、ファリヤ (Manuel de Falla y Matheu 一八七六〜一九四六) の室内楽曲、ラヴェル (Joseph-Maurice Ravel 一八七五年〜一九三七) の弦楽四重奏などが記されている。

労働運動から一時退却した立野は、しばらく離れていた芸術の世界に戻ったように見える。

現在のフランソア喫茶室にはかなり貴重な絵画が掲げられているが、創業時点では、さすがにこれらの絵を揃えることはできず、複製で間に合わせた。この時掲げられた複製は、フランソワ・ミレール (Jean-Francois Millet 一八一四〜一八七五) の「種まく人」、レオナルド・ダヴィンチ (Leonardo da Vinci 一四五二〜一五一九) の「モナ・リザ」、「最期の晩餐」のキリストの下絵、ヨハネス・フェルメール (Johannes Vermeer 一六三二〜一六七五) の「青いターバンの少

女」, サンドロ・ボッティチェリ (Sandro Boticelli 一四四五〜一五
一〇) の「春 (プリマヴェーラ)」, 「ヴィーナス誕生」などであった。
創立時から現在まで掲げられているのは, ダヴィンチのキリストの
下絵の複製と, パリ市街地図のみである。

一九三四年九月下旬, フランソア喫茶室は営業を始める。様々な
制約を受けながらの営業であったにもかかわらず, フランソアは,
当時の京都で最高級店の一つとなった。それまで汗と血と虱にまみ
れて争議現場と留置所を往復していた活動家が建てたとはとても思
えない, 欧州のカフェを模した空間が出現した。

フランソアの出現に危機感を抱いたためか, 三四年九月, 周辺の
既存店十数軒が「五条カフェー連盟」という同業者組織を結成して
いる。この連盟は, 喫茶店間の相互連絡・親睦, 酒類料金統一, 不
良風紀排除, 店員教育, サービス改善向上を目的としていた。連盟
事務所は, フランソアのすぐ近く, 河原町四条下る「タイガー」喫
茶店にあった。⁴⁷

フランソア喫茶室を準備するために資金を提供したのは, 立野の
父・吉之助であった。米相場失敗で苦労をかけたことへの償いだっ
たかもしれない。あるいは, 正一が左翼活動から離れることを期待
したのかもしれない。

共産党再建の目標を放棄する気など毛頭ない立野であったが, 店
を開業すれば, 警察の要視察リストに掲載されることは確実であっ
た。京都の党関係者は, 三三年の六・二〇検挙以来, 弾圧の暴風に
晒されており, 党再建など思いもよらなかつた。⁴⁸ 洛北友仙争議か

ら僅か四年で, 立野らの労働運動は振出し以前まで押し戻されてい
た。まずは自身と同志の生計獲得を最優先にせざるを得なかつた。

フランソア創業の直後, 室戸台風が京都を襲う。一九三三年九月
二一日朝, 上陸時最低気圧九一一・六ヘクトパスカルを記録したこ
の巨大台風は, 始業直後の淳和・西陣小学校舎をなぎ倒し, 数百の
児童の生命を奪った。京都市内の被害は洛西, 洛北に集中し, 映画
会社の各撮影所にも甚大な打撃を与えた。交通・通信は麻痺し, 市
内各所で負傷者の呻き声が聞こえた。⁴⁹ やがて, 増水を続けた鴨川
と高瀬川の水があふれ出し, 四条一体が浸水した。フランソアの店
内にも泥水が流れ込み, 営業中断を余儀なくされた。ようやく水が
引いた後も, 店員は店内の清掃と消毒に忙殺された。

台風被害に対処するため, 十月二日, 京都消費組合, 陶磁器工組
合, 社会大衆党京都府連, 総同盟京都府連などが「京都地方無産団
体風害救援協議会」を結成する。議長には, 立野の旧友で, 西陣織
物労働組合出身の赤石円三郎が就任した。協議会は, 政府米の払下
げ, 救済金, 低利融資, 被災学童への治療費獲得などを目標に運動
を開始し, 全国水平社京都府連も参加した。⁵⁰

台風の余波が過ぎると, フランソアにも客が現れた。喫茶室の扉
をくぐった者は, その瀟洒なインテリアに感嘆した。店員が手渡す
メニューの表紙は, 詩的な情感の漂うバレリーナの線画で飾られて
いた。この線画は, 日本に帰国中の藤田嗣治 (一八八六〜一九六八)
に製作を依頼したものであった。この時期に藤田は関西方面でも活

動しており、一九三五年には大阪そごう百貨店で、三六年には京都関西日仏学館壁画と京都丸物百貨店で壁画を製作している。⁵¹

コーヒー、紅茶、ジュース、リキュールの他、トースト、サンドウィッチ、ケーキ等、今日と同じ品目が当時のメニューにも見られるが、これらに加え、リンゴ、バナナ、桃、パイナップル等の果物も出されていた。コーヒー一杯が一五銭であったが、これは当時としては高めの価格であった。

必然的に客層は知識人や芸術関係者に傾き、特に三高、京大、同志社、立命館などの学生や教員達が足繁く訪れた。藤田嗣治の姿もたびたび見られた。彼らは店内で政治・文学・芸術を論じ、あるいは月毎に入荷される新譜レコードに耳を傾けた。客の中には私服警官も混じっていたはずだが、学生達の少々の体制批判は適当に聞き流していたようである。大阪毎日新聞顧問・澤村幸夫と思われる人物が、京都帝国大学新聞の中で、当時の喫茶店の様子を語っている。

東京では警視庁が学生主事とタイアップして大学生のカフェー、喫茶店出入に猛烈な弾圧（事実は噂ほどでもないらしい）を加えているが京都は学生主事にだって粹にくだけた御仁がいっぱいいるから学生連ものうのとカフェー喫茶店に溺没し：

52

澤村によると、医学、理学、工学など理系学生は、どちらかと言えば大人しく振舞っていた。一方、文学部の学生は高遠な議論闘争

を白熱させ、店員が閉口することもしばしばであった。

創業から一年ほど経った頃、佐藤留志子（一九一九〜）が店のメンバーに加わる。

佐藤留志子は一九一九年三月二三日、福井県に生まれた。留志子の父・貞次は新潟県南魚沼郡の出身で、上杉家家臣の末裔であった。上京し、中江という近衛師団将校の書生となり、明治大学に通う。

一方、留志子の母・豊は、永平寺の開祖・道元とともに宋から渡来した鍛冶匠の家系に育った。やはり上京し、中江宅で行儀見習いをしていく。ここで貞次と知り合い、結婚した。

貞次は外交官を目指して勉学に励んでいたが、結核を患い、豊の郷里である福井県・武生で療養することになった。貞次の容態は快方に向かい、福井県警察に就職する。貞次と豊は、福井県内で転勤を繰り返しながら、五男二女をもうけた。佐藤留志子は六番目の子であり、福井県立武生高等女学校で学んだ。

四男の佐藤晴行（一九一四〜一九八〇）は、京都に出て京都市立絵画専門学校に入学、池田遥邨に師事して日本画を学ぶ。帝展で活動していた池田に従い、晴行も新文展や日展に出品するようになる。途中、須田国太郎から油彩を勧められたようだが、終生、日本画の

道を歩んだ。⁵³

晴行は留志子を立野に紹介し、彼女はフランソアで働くことになった。留志子は当時まだ一六歳であったが、行儀見習いや女学校での勉強を経ており、喫茶店を切り盛りするだけの能力は身に付けていた。

しかしである。留志子の父・貞次は福井の警察署長となっていた。京都の問題は管轄外であるとはいえ、身辺に左翼関係者がいれば、あらゆる情報を収集し、報告・記録する義務が生じる。立野が逮捕されるようなことにもなれば、貞次の進退にも係わる。

一族郎党挙げて留志子を引き留めるか、さもなければ勘当して不思議ではない。しかしその後、留志子は佐藤家から絶縁されることもなく、立野家と佐藤家は親交を続けた。恐らく佐藤貞次は、立野が喫茶店開店を機に、左翼活動から足を洗うことを期待していたのだろう。

第三高等学校80年史⁵⁴には、一九三五年頃の喫茶室玄関前に、留志子と三名の女性店員が並んで写っている。留志子と一名の店員はワンピース姿、二名の店員は割烹着姿である。彼女達は、年齢が近いためか、大学生よりも三高生を好いていたという。フランソア喫茶室は大いに収益を上げ、立野らの生計にも余裕が生まれた。

しかし共産党の再建は困難を極め、立野らの活動も低迷していた。フランソア開店直前の三四年八月、金井健吉が満期出所し、翌三五年二月、坂本秀雄が出所する。しかしその後、兩名が労働運動に関

わった形跡はない。赤石円三郎が議長を務めた京都地方無産団体風害救援協議会も、目立った成果を上げなかった。これを見かねた社大党京都府連は、三四年十二月八日に同協議会を「京都無産団体協議会」と改め、当時深刻化していた東北地方冷害の救援運動に乗り出した。この運動は一〇〇円近い義捐金を集める成果を収めている。

一九三四年秋頃、鐘紡、日本電池、市電、大学、友仙工場、消費組合などに共産党の細胞が復旧したが、目立った活動には至っていない。一九三五年に入り再び弾圧が強まり、三月には東京の党中央委員が一斉検挙され、統一的な行動が不可能となった。

学生の左翼談義を大目に見ていた京都の警察も、共産党に直接繋がる活動家は容赦せず、同年四月七日以降、関係者二七名を検挙した。この時、元全協活動家であった鱈淵清虎^{わにがらきよとら}（一九一三～一九三五）

⁵⁵が逮捕後に西陣署で拷問死したほか、党多数派関西地方委員会の沢田平八郎（一九一三？～一九三五？）が山科刑務所で獄死した。⁵⁶

⁵⁷

「京都スタヂオ通信」と「土曜日」

松竹下鴨撮影所の俳優・斉藤雷太郎は、一九〇三年十月一日、横浜で生まれた。父は日雇い労働者だったが、離婚により父子のみ

の幼少時代を送った。小学校を中退後、東京の文房具店や筆筒屋で働く。一九二二年六月、斉藤は東京の歌舞伎座で講演していた小織桂一郎（一八七〇〜一九四三）、木村操らの一座に弟子入りする。その後、伊井蓉峰（一八七一〜一九三二）一座に転籍、さらに山田好良一座を経て、東亜キネマに入社する。一九二五年、賀古残夢（一八六九〜一九四〇）監督の時代劇「盲目の使者」に脇役で出演するが、興業は振るわなかった。⁵⁸

さらに五月信子（一八九四〜一九五四）らの近代座プロダクション、小澤得二プロダクション等を転々とし、一九三〇年秋頃、京都・下鴨の阪東妻三郎（一九〇一〜一九五三）プロダクションに入社する。こうした度重なる転籍は、当時の演劇・映画経営の不安定さや、プロダクション間の人材争奪戦が背景にあった。坂妻プロでは、斉藤の演技が坂東の目に留まり、比較的重要な役に抜擢される。しかし一年ほどで坂妻プロは解散し、下鴨撮影所は松竹に吸収される。一瞬掴みかけた桧舞台の夢は儚く消えた。

その数カ月後、斉藤は全協の梶谷や、共産党京都市委員長・坂齋小一郎らと出会う。そして一九三三年六月の弾圧で梶谷や坂齋が去るまでの約一年半、斉藤は全協のビラ印刷などを手伝った。短期間かつ限定的な関与ではあったが、この一年半の経験は、斉藤をより積極的な行動へ向かわせる契機となった。

斉藤は、同志社の中島重（一八八八〜一九四六）や和田林熊から

助言を受けるとともに、広告代理店・京華社の武田昌男、同盟通信の児島英之助らと討議をした。これらと並行して、撮影所内の若い同僚同士で集まり、各々が自由に書いた文章を綴って回読する。この回読誌は好評であった。そこで、京都市内にある日活、千恵プロ、第一映画、新興キネマ等の撮影所の有志に呼びかけて、討論と親睦の場を提供するための機関紙出版を決意する。

一九三五年八月一日、斉藤は苦勞の末に「京都スタヂオ通信」第一号を発行する。「通信」の原稿は失われているが、新人女優採用、島原のおいらん道中、チャップリン来日などの話題が掲載されたという。⁵⁹

原稿は思うように集まらず、斉藤自らが不足分を執筆しなければならなかった。また、毎号一〇〇〇部の印刷代を賄うはずの広告収入の確保にも苦心した。一着しかないトラの子の服を着て、京都の街を自転車に乗って走りまわった挙句、加茂川の堤防で夕立に会い、ずぶぬれになることもあった。⁶⁰

それでも、フランソア喫茶室をはじめ幾つかの商店は、快く広告掲載を申し出た。新京極の化粧品店「よーじや」、酒場「スタンド」、江戸風料理「正宗ホール」、河原町六角のフルーツパーラー「クラブ香里園」、四条河原町界隈の喫茶「ランチェラ」、「ビクター」、「築地」、「アラビヤ」、祇園繩手のフルーツパーラー「八百常」などが毎号広告を掲載した。

何等バックも資力もない風来の私に、なかば同情のかたちで

広告をくれたのですが、手を合わせたいほど嬉しかった。三十年も過ぎた今でも（註・本手記執筆は一九六六年）、このお店の前を通る時、当時のことを思いうかべて、感謝の気持ちで一杯になります。⁶¹

この頃、齊藤は東京の第一書房から一〇銭で販売されていた文化雑誌「セルパン」を講読していた。そして「スタヂオ通信」に一流文化人の寄稿を呼び込み、「セルパン」の大衆版のような新聞にすることを切望していた。⁶²

当時、新聞に時事記事を掲載するためには、新聞紙法規定により、一定額の保証金を役所に納める必要があった。同法第十二条は、東京、大阪で発行する新聞に二〇〇〇円、人口七万以上の都市では一〇〇〇円の保証金を要求しており、月間発行回数が三回以下の場合には半額としていた。⁶³ 京都市で月一回発行する「京都スタヂオ通信」ならば、五〇〇円を納める必要があった。

齊藤は次なる目標として、五〇〇円を工面し、「通信」に時事問題を書くことを目指す。当時、齊藤の月給は四〇円であったが、広告の獲得や、借家代の節約により、僅か八カ月で五〇〇円を貯めた。この時期の齊藤の暮らしの過酷さは、月給二〇円で激務に耐えていた京都消費組合の常務者達の境遇をも凌いだ。さらに、大物俳優に頼んで書いてもらった色紙を売りさばく、俳優のファンに出資を依頼するなど、あらゆる手段を使って資金を稼いだ。⁶⁴

一九三六年四月、齊藤は保証金五〇〇円を京都府庁に納めた。「通

信」の時事記事掲載が可能となり、齊藤は映画関係者以外の人物にも寄稿を依頼して廻った。この働きかけに対して、文芸春秋による欧州派遣から帰国していた住谷悦治（一八九五〜一九八七）⁶⁵ が応じた。同時に住谷は、齊藤を能勢克男に紹介する。

この時、能勢ら「世界文化」同人の間では、「世界文化」の大衆版発行の話題が持ち上がっていた。⁶⁶

「世界文化」の編集グループの中で、「世界文化」の大衆版を作ったらどうだろう。作れるだろうか。作れるかもしれない。

——と最初に思いついたのは久野収であった。ある時の編集会議で彼はふとそれを言い出した。「中井君、能勢さんあたり、どうだ」と彼は一座を見廻した。中井と私は、その頃、市民生活協同組合の苦渋にみちた仕事をやっていて、労働者や婦人のグループと接触があった。私は、久野に対して即座に「引受ける」とは、その時言えず、口ごもっていた。⁶⁷

「世界文化」同人にとって、時事記事を合法的に掲載できる「通信」の存在は魅力的であった。「世界文化」同人と齊藤の思惑は一致し、一九三六年七月四日、「京都スタヂオ通信」を改題した「土曜日」が創刊される。「世界文化」自体も並行して刊行が続けられた。

「土曜日」の紙面が、フランスの人民戦線機関紙「金曜日」を参考にしたことはよく知られている。一九三五年七月にモスクワで開

催されたコミンテルン第七回大会では、反社会主義路線から人民戦線運動への転換が提唱された。ナチス・ドイツの伸長を恐れたスターリンの場当たりの右旋回であったが、ともかくもスペインやフランスの人民戦線政権樹立には肯定的に作用した。「金曜日」

ゾーフドルデイ

は、フランス人民戦線政権の機関紙として一九三五年一月に創刊され、アンドレ・ジッド（一八六九～一九五二）やロマン・ロラン（一八六六～一九四四）らが編集にあたった。三八年秋の政権解消まで発刊が続き、最盛期で一〇万部の読者を獲得したとされる。⁶⁸

タブロイド版六頁の一ページ目には、伊谷賢蔵（一九〇二～一九七〇）の挿絵と、中井・能勢による巻頭言が飾った。「スタヂオ通信」を引き継いで一ページを映画欄とし、残り四ページを文化欄、社会欄、婦人欄、くらぶ欄（趣味／娯楽）に割り当てた。「世界文化」に比べ格段に平易な内容・構成となったが、慎重な表現を用いつつ反ファシズムの基調も維持された。

紙面の編集は能勢、中井、そして当時学生に人気のあった林要が責任を持った。記事の執筆は「世界文化」同人の辻部政太郎、瀬津正志（一九〇八～一九八六）⁶⁹、新村猛、長広敏雄、伊谷賢蔵、岡田正三、武谷三男、住谷悦治、竹中一雄、加納竜去、西谷宗雄、堀内カツ子らが担当した。

財政、広告配給は齊藤が責任を負い、田中飛鳥井町三一の齊藤宅を発行所に定め、近くの印刷所で印刷した。校正に立ち会う齊藤、能勢、中井の傍らで、年配の従業員が「フロンプピレールなぞ」と

言いながら植字をしていた。中井は、フランス人民戦線 *Front Populaire* の息吹が日本の場末の印刷屋にもやって来た、と感慨にふけた。⁷⁰ 場末と言っても、田中界限は友仙争議や部落解放闘争の前線地区だったのだが。争議の盛衰を眺めてきた印刷工にとって、人民戦線など何の期待もできなかったのかもしれない。

夕方帰りに、出町叡電前のキネヤと云う大衆食堂へよった。

コーヒーの付いた参拾銭のランチを、注文しようとしたが、ふところの都合で参拾銭のライスカレーを三ツ注文して、水でそれを喰べた。代金は私が払ったが、後で中井さんが気の毒がって居た。私も先生がたに、水でカレーライスはひどかったと思つた。⁷¹

フランスア喫茶室が創業時に台風に襲われたごとく、「土曜日」も創刊直後にハプニングに見舞われた。苦しい経営を続けていた京都消費組合に対し、三六年七月十四日、京都府農林蚕糸課組合係が解散を命じたのである。非組合員への物品販売と経営不振を名目とする解散命令であった。この命令により、ただでさえ薄給の常務者達は失業し、組合を避難所としていた共産党、全協、旧総評の活動家達は、かけがえのない抛り所を失う。そして資産・負債の清算さえ行われないまま、組合は消滅した。⁷²

実質的な経営が旧無産者消費組合出身者によって行われていたため、理事職の能勢・中井らが責任を追及されることはなかった。しかし、

能勢・中井も組合の失敗には負い目を感じていた。家庭消費組合を分裂させた党派主義、支配・被支配の問題は、当時肅清の嵐に見舞われていたソ連の暗部を思い起こさせずにはおかなかった。⁷³ 同じ過ちを「土曜日」で繰り返すことは、絶対に避けなければならない。組合常務者との対立に散々苦しんだ能勢・中井は、慎重に斉藤に接した。「土曜日」創刊号も、「京都スタヂオ通信」の刊号を尊重し、第一二号となっている。

中井正一が執筆した創刊号巻頭言の冒頭の一節は、当時の彼らの境遇を端的に言い表している。

しぶく波頭と高い日の下に、一杯の自分の力を感じた冒険者の様に、かつて人々は生きた事があった。今は冷いベトンの地下室で、単調なエンジンの音を聴きながら、黙々と与えられた部署に、終日を暮す生活が人々の生活となつて来た。⁷⁴

友仙労働者や朝鮮人とともに闘った総評の活動家、同志社の不正経営に抗議した能勢、瀧川擁護に全力を注いだ久野、真下、中井ら、全協の梶谷の意志を引き継いで、「京都スタヂオ通信」を立ち上げた斉藤、そして消費組合の常務者達。かつて彼らは、自分の力を信じて立ち上がり、荒れ狂う弾圧の波頭の上に、希望の陽を見ていた。しかしその陽は陰り、監視と裏切りの暗雲に覆われた。今や彼らは「冷いベトンの地下室」に追い詰められ、自身の内なる暗部に向き合っていた。

それで一人前になったと老人からほめられ、しつかり者だと友達から愛され、自分にも一種の成長し、苦労したという自信ができて来るのである。その時代の誰もが考える生き方を掘りあてて来たのである。

所謂中庸の道を知ったのである。あたるさわりのないイメージな道を心得て来たのである。貫禄がついて来たのである。⁷⁵

このような貫禄に何の意味があるのか。たとえ半人前と呼ばれ、ストライキ崩れと呼ばれようとも、「土曜日」同人達にとって、抵抗を諦めることなど論外であった。⁷⁶

とはいえ、このまま「土曜日」刊行に突き進んで、弾圧を免れることができるだろうか。それでなくとも、既に彼らは親、兄弟、配偶者、子供、そして同志を十分傷付けてきたのではないだろうか。そしてもし、弾圧が現実のものとなった時、彼らは転向せずにいるのだろうか。

ともかくも今は、内部分裂を起こさず刊行を続けることが最優先であった。能勢、中井、斉藤らは、自宅やフランソアなどで編集会議をしながら、「土曜日」の進路を探り続ける。執筆陣の間の確執は絶え間なかった。三七年一〇月二〇日付第四三号では、姫路城ロケ現場の事故をめぐって、能勢と斉藤が、相違する見解を載せている。⁷⁷ ⁷⁸しかし斉藤の回想によれば、こうした確執が遺恨を生むことはなかったようである。

仲の良い夫婦が子供のこともめるように、『土曜日』のこと
で、能勢さんとは時には私心のない、固い対話がなんだかあつ
たが、不快で終わるような対話は一度もなかった。それが中井
さんにどう反映したか、とかくのうわさも出たようだが、能勢
さんとの二人きりの対話のなかで、他の人達に知られてない苦
労と、私心のない誠実さをみとめて、更に親近感を強めたと思
う。⁷⁹

「土曜日」は、新京極や百万遍などの学生街の書店に、五部から
三〇部置かれた。価格は三銭であつたが、創刊当初の売り上げは芳
しくなかった。斉藤が考えていた「土曜日」の読者は、店員や労働
者であつたが、彼らはもともと本屋に来ることが少なかった。一方、
本屋に頻繁に出入りする学生や会社員は、既存の文芸雑誌を買つて
いった。「本屋の店頭で真面目な出版物を買わせると云うことが、い
かにむずかしいものであるか身に沁みた」と斉藤は回想している。⁸⁰
斉藤は「土曜日」の宣伝のため、二〇〜三〇部を広告主の喫茶店
へ無料配布することにした。

喫茶店の各テーブルに一部づつ置いて、お客に見せるのです。
無料なら気まぐれに見ますし、読めばかならずついて来ると思
つた。なかには持つてかえる客もいる。なくなつたらまた置く
ように女店員さんにたのんでいたの、「土曜日」の評判は手に

とるように解ります。⁸¹

「土曜日」には京都で働く人々のルポルターージュが積極的に掲載
された。三六年八月から九月にかけての社会欄には、友仙職工の暮
らしを描いた記事がある。五年前まで、立野らとともに激しい労働
争議を起こしていた友仙職工達だが、今では組合のほとんどが解体
し、友仙業そのものも不況に苦しんでいた。

「暑い時分は仕事があつたんやが、此頃ときたらなつとらん
な、値は安いし、仕事がないとくるから息するところがあらへん」
「ここは下職やさかいよけいや、上職にしぼられよるからな。
俺もなんとか考えんとあかへんと思うとるのや。ここのおやじ
を、こづいても始まらんし、と云つて今すぐ行くところもないけ
どなあ」

(中略) 美しい舞妓のキモノになる友仙は京都特産、京都
には友仙工場は一千位ある。従業員五十人位のが最大で他は殆
んど五、六人か十二三人位の最も封建的な小工場、洋服が多く
なり、レイヨンが盛んになつて、友仙産業はだんだん衰滅する。

(職場の夏・その一 天窓だけの部屋

——友仙工場はさびれる——三六年八月一日付第一四号)

半失業状態。仕事のある時でも手間賃は戦前に等しく、生活
費は二倍三倍なので、苦しいなどと云うどころではない。昔は

着物も紺の筒袖でよかったが、今はやはり背広を着ている者があるから、変れば変わったものである。

最近では機械でできない部分——ぼかしなどの仕事だけをするものが、かなり出来たようだが、なんだが明治の昔に帰って行くような気がする。友禅の特殊な技術も極く少数の人々が伝えて行き、限られたものになって行くのではないだろうか。

（生産古老談 老職工の昔物語——うつり変わる友禅染——
三六年八月一五日付第一五号）

職工の暮らしだけではない。三六年九月五日付第一六号には、古物商のルポルターージュがある。

「いやどうして、儲からぬが、古物商はどんどんふえているんですよ。ブローカーも沢山出来ました。軍需工業が盛んなので、古鉄を買い集めるんですね。そうです、古鉄屋さんは仲々儲かっているらしいが。

永い不景気で職にあぶれた人が、やり易いので、先づこの商売のことを考えるんです。

親の代から続けている人は少なく、元会社員だとか、運転手をして居った人や、友禅工も居るといふ風に色々な人が居ります。こんな調子だと、実際先が思いやられますよ」

（古物の世界に映る不景気——古物屋さんの内あけ話——
三六年九月五日付第一六号）

言うまでもなく、このような不景気な記事だけで紙面が埋められていた訳ではなく、むしろ、映画、ファッションなど娯楽性の強い記事が「土曜日」の中心とも言えた。

佐藤留志子ら喫茶店経営者達は、テーブルに置いた「土曜日」を目当てにした客がいることに気付く。そこで斉藤と交渉し、一〇〇部を一円五〇銭で購入し、テーブルに常備した。次第に「土曜日」の評判は広がり、喫茶店が競って購入した結果、発行部数は急速に伸びていった。

当初二〇〇〇部であった発行部数は最大八〇〇〇部に達する。学生の帰省に合わせて発行部数を調整したため、平均では四〇〇〇部程度となった。⁸²部数増加の一方で、印刷費用も値上がりしていった。創刊当初、一〇〇〇部三〇〇円であった印刷代は三五円に、増刷一〇〇〇部一〇円が一二円に値上がりしている。しかし斉藤は、「スタヂオ通信」以来の広告主への感謝から、四五分の一面あたり一円五〇銭の広告費を値上げすることはなかった。

フランソア喫茶室が創刊号に掲載した広告は、名曲レコード演奏が紹介されている。

「フランソア」

京都最高の純音楽喫茶室／古典・近代・現代の名曲レコード
及英仏HMV盤豊富・毎月**ビクター**並に**コロンビア**洋楽新譜レ
コードの発表演奏を致して居ります／Salon de thé François

四条小橋西詰南入西側

他の飲食店の広告には、店主自作の詩が添えられ、「土曜日」の片隅から叙情を漂わせていた。

思い乱れて／杯に／ゆるるころの／雪もよい――

「蹄洋酒房」京・河原町四条上ル東

くまもなく／思いのすみて／琥珀の水に／こころ見入る

「鳴門茶屋」河原町四条上ル二筋目東入

ガラス戸がゆれて／ふと香る**フリジヤ**／紅茶の湯気に／眼鏡が曇って

「僕の家」京・東一条西入

静かな片隅が皆様のお出でをお待ちして居ります

「異人館茶房」河原町六角書籍会館前東

(以上、一九三六年十二月五日付、第二二号)

土曜日創刊から二ヶ月後の三六年九月五日、四条河原町上ル東入に高級喫茶「カレドニーヤ」が創業し、たちまち「フランソア」と人気を二分する。「カレドニーヤ」のオーナー・佐々木きみは、長

身の麗人で、その大きな瞳には憂愁が漂っていた。訪れた客には、微かに首をかしげながら、囁くように語りかけた。学生達は、佐々木の美しさに惹かれつつも、気恥ずかしさを隠しつつ、彼女に「ドニーヤの目玉」というあだ名を付けた。佐々木は微笑みながらこのあだ名を受け入れた。⁸³以後、「カレドニーヤ」は、「かれどーにあ」、「かれどにあ茶室」と幾度か表記を変えながら、数号おきに「土曜日」に広告を掲載している。

あらたなる歓喜のあり／近代人の宵辺に／かれどにあ茶室

(一九三七年六月五日付、第三四号)

「カレドニーヤ」に対抗するためか、同月に「フランソア」は写真部を開設した。三六年九月五日付「土曜日」第十六号には次のような広告を掲載している。

カメラ・音楽・コーヒ／初秋・和かな仏蘭西の情趣／**フランソア喫茶室**／古典近代現代の名典・英仏HMV盤豊富／**写真部**を新設致しました。／現像・焼付・引伸／仕上の優秀・時間の短縮正確をモットーとして生れました当喫茶室写真部へ是非御用命下さい

立野正一は、当時極めて高価であったカメラで、たびたび留志子をモデルに撮影した。この頃撮られた留志子の顔写真の裏面には、

室内、絞四・五、レンズ四・五、サクラUSクローム、一秒『人物』

などのメモ書きがあり、立野がかなり写真に凝っていた様子がかがえる。

飲食店以外では、「通信」以来からの常連である「よーじや化粧品店」、藤井大丸百貨店、藤田化粧品店などが、連続して「土曜日」に広告を掲載している。また、水平社の朝田善之助が勤めていた寺島靴店⁸⁴も、二八号と三九号の二回だけであるが、広告を出している。

弾圧

一九三五年五月の鰐淵清虎拷問死以降、京都の共産党活動家への包囲網はさらに狭まっていった。党関係者が、京都消費組合主催の比叡山レクリエーションに参加した時も、現場で警察の総検束を受けた。一九三六年一月から四月にかけては、党関西地方中央委員会メンバー八〇名強が検挙されている。一月一日には、美工出身の版画家で、土田麦僊に師事した浅野竹二（一九〇〇〜一九九九）が検挙された。⁸⁵

コミンテルン第七回大会の方針転換を受けて、三六年三月頃から

は関西の共産党関係者も人民戦線戦術への転換を模索し始める。三六年七月上旬には党中央再建準備委員会を結成し、「労働者階級の反ファシショ統一戦線のために」というパンフレットを発行した。このパンフレットの発行は、「土曜日」創刊とほぼ同時である。両者が連携行動を取っていたとは考えにくいだが、立野正一らを通じて、情報交換は行われていたと思われる。

人民戦線戦術に基づいて、党は社会民主主義団体との大同団結を模索し始めた。しかし、社会大衆党（一九三二年結成）や総同盟系労働組合は、共産党の接近を極度に警戒し、警察も共産党関係者の合法組織加入を認めなかった。

総同盟に秋波を送っていた団体の一つに、京都織物工組合がある。織物工組と共産党との間に直接の関係はなかったが、立野の同僚の赤石円三郎が、西陣を基盤とするこの組合で活動していた。当時、西陣には一二五のビロイド工場があったとされる。西陣のビロイド工はほぼ全員が朝鮮人であり、製品の美しさとは対照的に、苛酷な労働条件に喘いでいた。三六年二月の反賃下げ争議では一定の成果を上げ、風害救援協議会で挫折した赤石は、古巣の西陣で一矢を報いた。

三六年三月一日、総同盟への合同を審議しようとした矢先、工場側は再び賃下げを実施する。組合は直ちに争議で対抗し、労働条件改善を訴える朝鮮語と日本語のビラが西陣に飛び交った。

——吾々が何等反対することなく、資本家の為すままに放任

せんか、吾々の前途には餓死の一途あるのみ。かかる無慈悲なる資本の攻勢に抗し逆襲すべく、ビロード工五百の兄弟は吾が京都織物工組合の旗の下に賃下げ反対闘争を闘い大勝利、既に攻勢への第一歩を踏み出した。京織こそ、全京都織物労働者唯一の階級的組織であり城塞である。ここに於て吾々の責任の重大なるを痛感する。顧みるに西陣地方には幾多の組合が生起しているにもかかわらず、今はその跡形もなく潰滅している。その原因は多々あるだろうが、吾々の見る所その最大原因は先輩指導者達の過まれる認識に基くものなること明らかである。幸これ等一部先輩達は自己の過れる認識の故に、社会ファッショへ転落を急ぎつつある。吾々はかかる分子が、吾が陣営より掃蕩され尽されることを階級の為に喜ぶと共に、これ等反動分子と徹底的に闘うものである。今や情勢は、吾々の積極的活動を望んでいる。吾々は京都唯一の階級的組織たる京都織物組合の旗を守って、死力を尽して戦うことを誓う。

しかし、ビロード工達の生活状態は極度に悪化しており、彼らの生計維持のため、ストライキは限定して実施せざるを得なかった。争議ははかばかしい進展を見せず、支持者からの寄付も間もなく底を付いた。さらに警察はビラの配布、行商隊の結成を禁止した。三月二二日、力尽きた組合は、極めて不利な条件を受け入れ、争議を打ち切る。争議の後、組合員は急速に離散し、六月頃には僅か五〇名程度まで減少した。⁸⁶

労働運動が敗北を重ねる中で、朝鮮人労働者の生存空間は急速に狭まり、それまで以上に過酷な生活環境に追い詰められていった。彼らが抵抗を止めた訳ではないが、京都の労働者組織との連携は急速に薄れていった。三六年十二月五日付「土曜日」第二二号の「流離の人々★半島出身者の仕事と地位」という記事では、朝鮮人労働者の苦境が婉曲に語られている。

松竹の清水宏という監督の作った「有り難うさん」という映画の中には、伊豆半島の山奥で、道路の開通に従事している半島出の同胞たちが、映っている。その映画によると、その人々は崖を切り、山を穿ってやっと自動車道路を開通させたかと思う間もなく、自分たちはそのバスに乗らずに、次の仕事が続いている信州へ徒歩で移って行くのである。峰を渡る人々の白衣の裾が秋風になびく景色が、その映画には映されていた。

孤立を深める共産党中央再建準備委員会は、なおも人民戦線を目指して、「赤旗再刊第一号」「労働組合統一のために」「反ファッショ闘争と人民戦線」などと題したパンフレットを街頭散布する。

三六年十一月末頃、警察は、これらのパンフレットが細川三西、平野順一らの指揮で配布されていることを突き止めた。十二月五日早朝、検事局、京都府警、各署特高係は検挙に乗り出す。細川は一時逮捕を免れ、関係者に証拠隠滅を指示するが、間もなく検挙される。⁸⁷

三六年一月二〇日には、治安維持法檢舉者の監視を目的とする思想保護観察法が施工された。翌三七年三月頃、立野の同僚で、三年前に出所した金井健吉が、同法施工に関連して行われた警察の聴取を受け、次のように答えている。

本法制定の原因を考うる時曾て治維法違反者として国家社会に多大の害悪を流し、転向者として世に出ては再び法に依り導かれねばならぬ厄介なる国民である自己の姿を静視する時心底から涌き出づるものは再び犯さぬという堅固なる決心と懺悔交々の感情で、法に対する不平、要求等は毛頭なく偏に本来の国民に更生せしめんが為の大御心の発露であると感謝している。⁸⁸

金井の供述は偽装転向であったかもしれないが、警察が金井の周辺を探り始めたことは確かだった。

いま一人の立野の同僚・白田銀一は、人民戦線戦術に限界を感じ、日本無産党京都支部の設立準備に取り組んでいた。三七年七月四日には、社会大衆党との連携に見切りをつけたメンバーとともに準備会委員会を開く。会計監査役となった白田は、支部財政に関する議案を作成した。⁸⁹

その三日後の三七年七月七日、日中両軍が盧溝橋で衝突する。思想統制はさらに厳格化し、共産党はおろか、日無党の結党禁止も時間の問題となった。

この頃、京都府警は、フランソアの収益が、共産党活動に流れていることを把握したと思われる。党の財政基盤が次々と切り崩されていく中、今やフランソアは、京都最大の党資金源となっていた。

三七年七月十四日、府警は、立野正一を檢舉し、同日治安維持法違反容疑で起訴した。⁹⁰容疑は、全協運動資金役一〇〇円提供、赤旗関西版その他党並びに全協文書交付、および党関西地方委員会署名パンフレット作成の三項目であった。⁹¹

立野の逮捕と前後して、喫茶店「ビクター」の黒田彌一（一九一〇？）、美工出身の書家・松尾隆夫（一九一〇？）も檢舉される。⁹²さらに府警は、文芸雑誌「リアル」も標的にした。「リアル」は一九三五年五月に京都市立第一工業学校（現・京都市立洛陽工業高等学校）の教諭らが、文学作品発表の場として毎月刊行していた雑誌である。政治性や時事性は無く、共産党と無関係であったにもかかわらず、三七年八月十三日までに「リアル」同人は全員檢舉された。三七年九月まで続いた弾圧は六三名を檢舉し、うち立野を含む三四名を起訴した。共産党の京都組織はここに全滅する。^{93 94 95}

立野を失ったフランソアは苦境に立たされた。佐藤留志子は、立野が収監された山科刑務所へ差し入れに通う一方、高騰する物価に経営を適応させようと苦慮する。このような時にこそ消費組合があれば役立つのだが、今となって後の祭りであった。

盧溝橋衝突前であるが、「土曜日」婦人欄に、消費組合に触れた投

書が掲載されたことがある。

収入もふえないのに、物価はどんどん上る一方で、台所で働く私たちは、ほんとうに途方にくれてしまうような時もあります。(中略)

こんな時に、すぐに考えに浮かぶのは、やっぱり消費組合のことですが、消費組合が教科書どおりにそろばんがとれて立ち行けばいいが、仲々うまく行かないで潰れてしまった話などを聞けば気が重くなります(一九三七年二月二〇日付、二七号、四ページ)。

立野正一と黒田彌一の逮捕にもかかわらず、「フランス」と「ビクター」は「土曜日」への広告掲載を続けた。

「土曜日」関係者の間では、紙面から時事性を除こうという話が出る。「リアル」のような無色の文芸雑誌までもが弾圧される状況である。しかも「リアル」の研究会には、新村猛や、陶磁器工組合出身で「世界文化」同人の谷口善太郎が顔を出していた。「土曜日」が弾圧を免れる理由は、最早どこにもなかった。

中井正一は、警察の捜索が迫ったと見ると、証拠に上げられそうな書籍を風呂敷に包み、下鴨の自宅近くの葱畑に放り投げた。そして危機が去ると、風呂敷を回収した。

こうした状況において、「土曜日」同人の間では、「隨筆風の『土

曜日』にする位なら、廃刊にした方がいい」「こんな時代だからこそ、一つの灯を消さないようにまもるべきだ」という声が、なお勝っていた。そのためか、三六年七月以降の「土曜日」は、やや停滞気味であった時事性が復活し、戦争の問題をもしきりに取り上げ始めている。

労働者のルポルタージュは、三六年十二月五日付第二号社会欄の「職場の作文」以降休止状態であったが、三七年九月二〇日第一号社会欄「風呂をほしがる女工さん」で復活している。一〇月五日第四二号社会欄には、一九歳の男性職工の投書が載った。この職工は、従業員五名の自転車部品工場で働いており、日給一円一五銭だという。しかし最近の物価高騰で、工場は休業状態になり、他の働き口も容易に見つからないと嘆息している。

最近私達は申合せて組合——総同盟と社大党へ入りました。組合費は五〇銭ですが、給料が易すぎて重すぎるので、年が若いのを理由に少年工並に三十銭にして貰い、逃避は十銭です。読みものは、月一回の労働者新聞、二回の社会大衆新聞、そして土曜日は全部購読しています。私だけ別に自由又はセルパンをとって皆にまわしています。まだ充分に読みこなせません。

この記事には、総同盟や社大党との関係を示唆することで、非合法活動の意思のないことをアピールする狙いがあったかもしれない。しかし警察は、既に社会民主主義勢力に対しても照準を向け始めて

いた。

ある日、学生風の男が斉藤を訪ね、「土曜日」の購読についていろいろと聞きたいので、一緒に来て欲しいと頼んだ。斉藤がこの男の下宿へ行くと、労働組合関係者と称する男達が数名いた。「土曜日」についていろいろな質問を投げかける男達が、警察のスパイであることは明らかだった。⁹⁶

「土曜日」の同人達は覚悟を決め始める。中井正一は、風呂釜の火で、蔵書の一頁一頁を破って焼いた。五年半前、瀧川事件の頃にドイツで実行された焚書を、いま自らの手で行うことになった。炎に投げ入れられるハイネ、マン、マルクスを目の当たりにしたフンボルト大学の学究達の痛みが、いま中井を襲っていた。

三七年一月八日、斉藤、中井、新村、真下、谷口が検挙され、「土曜日」の刊行は途絶した。続いて一月二六日に久野収、一月二七日、瀬津正志、一月二日、森永文典、十二月五日、大岩誠が検挙される。^{97 98 99 100}

十二月一五日、日本無産党への弾圧が実施され、全国で一挙に四〇〇名近い関係者が検挙された。京都では白田銀一も検挙され、日本無産党は跡形もなく消え去った。この時の検挙者の中には、社会大衆党に党籍を持つ者もいた。それまで合法政党を自認してきた社会大衆党は恐慌に陥り、直ちに検挙者を除名した。^{101 102}

翌三八年には「土曜日」「世界文化」関係者への二次検挙がはじまる。三月二三日に清水三男が検挙された後、六月二五日、和田洋一、米田三治、和田洋一、梯秀明、辻部政太郎、森本文雄、栗本勤、熊

澤復六、能勢克男、林要が、そして九月一三日には武谷三男が検挙された。^{103 104 105 106 107}

第三章 参考文献

- 1 藤井祐介「中井正一論——来るべき「集団」のために」現代文明論、第三号、二〇〇二年、三二—ページ
- 2 「京都帝国大学一覽」京都帝国大学、一九三四年、三四五—ページ
- 3 藤井「中井正一論——来るべき「集団」のために」(前掲)、三九—ページ
- 4 吉田正純「生活に対する勇氣(前編)——京大学生涯教育学・図書館情報学研究、第二号、二〇〇三年、二五—ページ
- 5 吉田正純「精神の明晰」『世界文化』集団の抵抗と学習 中井正一たちと(抵抗の学習)をめぐる諸問題(2)——京大学生涯教育学・図書館情報学研究、第三号、二〇〇四年、三九—ページ
- 6 「京都大学百年史・総説編」京都大学百年史編集委員会、一九九八年、三七九—三八〇—ページ
- 7 「近代日本社会運動史人物大事典」日外アソシエーツ、紀伊國屋書店、第三卷、一八〇—ページ
- 8 渡部編著「京都地方労働運動史」、三月書房、一九五九年、一二八—一二八三—ページ
- 9 吉田正純「精神の明晰」(前掲)、三七—ページ
- 10 京都帝国大学新聞、一九三三年五月二一日付、第一八二号、一—

- 1 1 瀧川事件・東大編集委員会編「私たちの瀧川事件」新潮社、一九八五年、六ページ
- 1 2 「京都大学百年史・総説編」(前掲)、三八四ページ
- 1 3 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲)、第三卷、九〇四ページ
- 1 4 「京都大学百年史・総説編」(前掲)、三九〇〜三九五ページ
- 1 5 「京都大学新聞の沿革」第二卷の背景・思想界』、京都大学新聞縮刷版、第二卷、一九六九年、一ページ
- 1 6 京都帝国大学新聞一九三三年九月二一日付、第一八七号、一〜四ページ
- 1 7 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲)、第二卷、九九八ページ
- 1 8 藤井祐介「中井正一論——来るべき「集団」のために」(前掲)、八九〜九〇ページ
- 1 9 吉田正純「精神の明晰」(前掲)、三五ページ
- 2 0 同、四五ページ
- 2 1 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲)、第三卷、二八五〜二八六ページ
- 2 2 吉田「精神の明晰」(前掲)、四六ページ
- 2 3 同、五四〜五五ページ
- 2 4 「口笛と軍靴」、京都大学新聞社編一九七八年、一四〜七四ページ
- 2 5 吉田「生活に対する勇氣」(前編)、二七ページ
- 2 6 「京都地方労働運動史」(前掲)、七七四〜七八一ページ
- 2 7 吉田「精神の明晰」(前掲)、二四ページ
- 2 8 「京都地方労働運動史」(前掲)、一〇五二〜一〇五四ページ
- 2 9 同、一〇五四〜一〇五六ページ
- 3 0 同、一〇五六〜一〇五八ページ

- 3 1 佐藤忠男編「日本の映画人——日本映画の創造者たち」日外アソシエーツ、二〇〇七年、二六六ページ
- 3 2 「京都地方労働運動史」(前掲)、一〇六四ページ
- 3 3 同、一〇六三〜一〇六九ページ
- 3 4 同、一三四二〜一三四四ページ
- 3 5 同、一〇六一〜一〇六三ページ
- 3 6 同、一一五一〜一一五七ページ
- 3 7 齊藤雷太郎『土曜日』以前——あるスタジオオマンの抵抗——現代文化、第三号、現代文化社、一九六六年、一〇二ページ
- 3 8 「京都地方労働運動史」(前掲)、二二八ページ
- 3 9 同、一四九ページ
- 4 0 伊藤俊也「幻の『スタヂオ通信』へ——かつて無名俳優齋藤雷太郎は最良のジャーナリストであった」れんが書房新社、一九七八年、九二〜九三ページ
- 4 1 「京都地方労働運動史」(前掲)、一二八一〜一二八二ページ
- 4 2 同、一二八〜一二九ページ
- 4 3 同、一二八二〜一二八三ページ
- 4 4 藤井「中井正一論——来るべき「集団」のために」(前掲)、八五〜八六ページ
- 4 5 佐藤編「日本の映画人——日本映画の創造者たち」(前掲)、一七一ページ
- 4 6 齊藤『土曜日』以前」(前掲)、一〇二ページ
- 4 7 京都日出新聞、一九三四年九月二一日付、一七一〇五号、一ページ
- 4 8 渡部編著「京都地方労働運動史」、三月書房、一九五九年、一二八〜一二九ページ
- 4 9 同、一九三四年九月二二日付、一七一〇六号、二ページ
- 5 0 「京都地方労働運動史」(前掲)、一四〇四ページ

5 1 近藤史人「藤田嗣治『異邦人』の生涯」講談社，二〇〇三年，一
 6 9 ページ
 5 2 京都帝国大学新聞，一九三五年二月二一日付，二一七号，四ペ
 5 3 ジ
 5 3 油井一人編「20世紀物故日本画家事典」美術年鑑社，一九九八
 5 4 年，一九五ページ
 5 4 「写真図説 紅萌ゆる丘の花 第三高等学校80年史」講談社，
 5 5 一九七三年，一五四ページ
 5 5 「近代日本社会運動史人物大事典」，日外アソシエーツ，紀伊國
 5 6 屋書店，第四卷，一〇二八ページ
 5 6 同，第二卷，八三六ページ
 5 7 「京都地方労働運動史」(前掲)，一二八五〜一二八六ページ
 5 8 佐藤編「日本の映画人」(前掲)，一五三ページ
 5 9 齊藤雷太郎「土曜日」以前——あるスタジオマンの抵抗——
 6 0 現代文化，第三号，現代文化社，一九六六年，一〇七〜一〇八
 6 1 ページ
 6 1 同，一〇四ページ
 6 2 同，一〇一ページ
 6 2 齊藤雷太郎「土曜日について」，復刻「土曜日」，三一書房，一九
 6 3 七四年，八〜九ページ
 6 3 奥平康弘監修「言論統制文献資料集成」第一卷，日本図書センタ
 6 4 ー，一九九一年，八一〜九六ページ
 6 4 齊藤「土曜日」以前——あるスタジオマンの抵抗——」(前掲)，
 6 5 一〇七ページ
 6 5 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲)，第三卷，八七ページ
 6 6 藤井祐介「『世界文化』と『転向』——中井正一と能勢克男」現
 6 7 代文明論，第四号，二〇〇三年，五七ページ
 6 7 京都大学新聞，一九六三年六月三日付，四ページ
 6 8 復刻「土曜日」(前掲)，二ページ

6 9 「近代日本社会運動史人物大事典」(前掲)，第三卷，八二三ペ
 7 0 ジ
 7 0 齊藤雷太郎「土曜日」について」現代文化，第四号，現代文化
 7 1 社，一九六八年，六四ページ
 7 1 同，六四ページ
 7 2 「京都地方労働運動史」(前掲)，一二九六〜一二九七
 7 3 吉田正純「生活に対する勇氣」(前編)「京都大学生涯教育学・図
 7 4 書館情報学研究」第二号，二〇〇三年，二四ページ
 7 4 「土曜日」，一九三六年七月四日付，第二二二号，一ページ
 7 5 同，一九三六年七月一七日付，第二三三号，一ページ
 7 6 吉田「生活に対する勇氣」(前編)「(前掲)」，二三三ページ
 7 7 伊藤俊也「幻の『スタヂオ通信』へ——かつて無名俳優齋藤雷太
 7 8 郎は最良のジャーナリストであった」れんが書房新社，一九七
 7 8 八年，一四四〜一五二ページ
 7 8 藤井「『世界文化』と『転向』——中井正一と能勢克男」(前掲)，
 7 9 六六〜六七ページ
 8 0 齊藤「土曜日」について」(前掲)，六九ページ
 8 0 同，六五ページ
 8 1 同，六六ページ
 8 2 復刻「土曜日」(前掲)，九ページ
 8 3 「写真図説 紅萌ゆる丘の花 第三高等学校80年史」講談社，
 8 4 一九七三年，一五五ページ
 8 4 「京都地方労働運動史」(前掲)，五七四ページ
 8 5 京都精華大学ギャラリーフロール編「浅野竹二遺作展」京都精華
 8 5 大学，二〇〇〇年，一三三〜一三三ページ
 8 6 「京都地方労働運動史」(前掲)，一四三八〜一四四二ページ
 8 7 同，一二八六〜一二八八ページ
 8 7 特高外事月報，一九三七年四月分，三七ページ
 8 8 「京都地方労働運動史」(前掲)，一四七二〜一四七五ページ
 8 9 「京都地方労働運動史」(前掲)，一四七二〜一四七五ページ

- 90 特高外事月報，一九三七年八月分，一〇ページ
 91 同，三七年九月分，三五ページ
 92 同，三七年八月分，一〇ページ
 93 同，三七年八月分，一〇ページ
 94 「京都地方労働運動史」(前掲)，一五〇九，一五二一ページ
 95 吉田正純「精神の明晰」(前掲)二ページ
 96 齊藤「『土曜日』について」(前掲)，六八ページ
 97 特高外事月報，一九三七年一二月分，九二ページ
 98 同，一九三八年五月分，一五〇一七ページ
 99 同，一九三八年七月分，八〇九ページ
 100 同，一九三八年一〇月分，二九〇三〇ページ
 101 「京都地方労働運動史」(前掲)，一五〇七〜一五〇八ページ
 102 特高外事月報，一九三七年一二月分，七五ページ
 103 同，一九三八年五月分，一五〇一七ページ
 104 同，一九三八年六月分，八ページ
 105 同，一九三八年九月分，二三三ページ
 106 同，一九三八年一〇月分，三〇三〜三一三ページ
 107 同，一九三八年一二月分，一七〇ページ